
魔法少女リリカルなのは 化学と幻想

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 化学と幻想

【Nコード】

N1333W

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

全てを失った少年は人ではない何かに転生する。

そして力を手に入れ何百年の時を生きてきた。

少年は巻き込まれ、転生者たちの争いに巻き込まれる事になる。

不老不死（前書き）

筆が進まないので新しく書きました。

一応前から考えていましたが……

！ つくわけで『魔法少女リリカルなのは 化学と幻想』が始まります！

不老不死

誰だって幸せになりたい、でもそれは絶対に不可能……
人になりたい、それも同義

結局幻想は幻想……化学には負ける………

だったら……なんでボクは生き残ってるの？

毎日のように同じ朝を迎える……
いつだって太陽は東から昇り西へと沈む、一度くらい反対になって
も誰も気づかないくらい当たり前な日々の始まり。

「……朝か？」

一つの公園で目覚めた少年……………

少年の格好は少し変わっていて、頭全体を覆いかぶさるような赤い帽子に血のように真赤な着流し、そしてそれを全て包み込むような黒いポンチョ

そして女のように綺麗な顔立ち、光が映らない真赤な瞳……………わずかに見える髪の毛は漆黑だった。

「朝食……………」

そう言って彼は川がある方に行った。

朝早いためあまりにも人が居ない、彼は川に入っていく……………素手で水面を割った。

その際に現れた魚を手で掴み口に運ぶ……………

バリバリグチャグチャモグモグ

……………ゴクン

彼はそれを生で喰らいつくし、手に持っていたひょうたんの栓を取り酒を飲んだ。

「……………行くか……………」

そう言って彼は素足で歩き出した。
彼は人ごみにまぎれて消えていく……………今までもこれからも……………
そのはずだった。

そして8時間後……………既に日は傾いていた。

季節は秋……………少しだが肌寒く、命が枯れ始める季節だ。

そして公園に一人少女が居た。

ブランコに乗っている、だが動いてない。

少女はうつむいている。

少女たった一人、まだ子供なのに誰も居ない。

彼女は一人ぼっち……………

似たような二人が開口するまでの時間は、余りかからない

必然

「…………どこそこ?……………」

彼は迷っていた、それもかなり遅くなった後で……………
そもそも迷子などめったにしない彼だが……
その理由は

「まあいいか、目的があるわけでも変える家があるわけでもないし」
こういう訳だ。

変える家が無い、つまり永遠に迷子のような状態なのだ。

どんなに足掻いてもそれは変わらない、彼自身がそれを変えようと
しない限り……………

少なくとも今は変えようとしても変えられないのだが

「ん?」

音がした方を見た。

そこは公園でそのブランコには一人の少女がいた。

だがあまりにもおかしかった……

「死ねえええええ！！！」

「お前がなああああああああ!!!」

結界を張って戦ってる二人の少年が居た。しかも魔法を使っている、だが……

「術式が荒い、自分で作ったんじゃない元からあったもの使ってるな……………」

かなり酷い評価だった、そりゃそうだ……地球に魔法があつた頃は本当に凄かった。

少なくとも非殺傷設定等無くてもいいのだ、魔力の密度やそれに乗せる魔力を極限まで減らせばいいだけの話だけなのだからだ。

「まあ、魔法陣は見たこと無い式だから興味はあるけど………所詮劣化版だな」

そう言うのと二人の少年が居る方向とは逆のほうから少女に近づいた。

「ちよつと良い？」

彼は少女に話しかけた。

「……はnしかけないで」

少女は拒絶した、単純に今の自分に踏み込まれたくないのだろう。実際自分に話しかけてきた少年は沢山居た、だが殆ど心の中では一物あった。

改めて少女は分かった、幼いながらも分かってしまった……………

世界がこんなにも汚い事に

「いや、少し教えてもらいたいただけだから……………」

少年は普通にそう言った、それしか興味が無いからだ。

「……………なにを？」

「ここら辺に宿とかない？」

「……………ない」

「そっか、じゃあコレ」

そう言って彼は石を少女の手に乗せた。

ただの石ではない、宝石、ダイヤモンドだ。

「!!!!」

「嫌がってたのに話を聞いてくれた御礼」

そう言って歩き出した。

だがいきなり彼の後ろにいきなり魔法陣が浮かび上がった。
その魔法陣の色は鮮やかな紅色で文字は漢字、描かれてる紋章は五芒星だった。
それで後ろから放たれた魔力で構成された弾を防ぎきった。

「何？」

彼は不愉快な表情を浮かべながら、後ろを振り向いた。

そこにはさっき殺し合いをしていた子供が居た。

「てめえ!!! なに勝手になのはちゃんに話してるんだ!!!」

「抜け駆けすんじゃないよ!!!!」

取り合えずすげえうるさい奴等だ、不意打ち上等か？

「知り合い？」

「ぜんぜん知らない」

「フーことは一目ぼれか、まあ可愛いし……少し無愛想だけど……でも恋愛対象としてみるなら対象外もいいところだ、もう少し年を取ればいいんだけど……」

「つかなんで殺し合いしてたんだ？」

「はぁ……取り合えず何？」

「何じゃねえよ!! てめえも転生者なんだろう!!?」

「なのはちゃんは俺のハーレム要因の最初だって決まってるだよ!!」
「!」

「ふざけんじゃねえ!! 俺のに決まってるだよ!!」

「……………こいつ等、そんなくだらない理由で俺に攻撃したのかよ……………」
「つかあの子も軽蔑した目で二人を見てるし。」

「馬鹿だ、馬鹿が居るよ……………」

「「何だと!!」」

「もう二度と近づくな、話しかけるな息するな目の前から消えて無くなれクズ」

そう言うともう顔すら見たくなかったため後ろを振り向き歩き出した。

「約束された勝利の剣!!!!」

「偽・螺旋剣!!!!」

少なくともこいつ等が馬鹿だったからある程度の対策は取れる。
しかし、贗作とは言えその名前を使うとか……………

「気に入らないね」

取り合えず魔法陣で攻撃を受け流して剣を使う奴に呪符を投げ飛ばした。

「ぐあ!?!」

取り合えず能力を封じた。
暫くは動くのだって辛い……

「おい！！てめえ！！早くあれを使え！！」

「っち！！しゃあねえな！！」

そう言うともう一人は短剣を作り出した。
創造魔法？

「破戒^{ルール}すべき^{プレイ}全ての^{カー}符！！」

そしてそれを突き刺した。

まさかアレって破魔の短刀！！？

そう考えた直後には短刀を持った奴をぶっ飛ばし剣を奪い取りその短剣を胸の中心に突き刺した。

パキンと何かが碎ける音がした。

「ふふふ………ハハハハハ………」

ようやく解けた、あの忌々しい呪いをッ!!

「アハハハハ………」

笑いながら俺はぶっ飛ばされた奴を見た。

顔が陥没して酷い顔だ。

顔中から血が出て顔を抑えてる………

少なくとも死ぬだろうな………

「動くな!!」

もう一人は『なのは』っていう名前の少女を人質に取っていた。

少女の目には少し涙が溜まっていた、まあ顔も青くなってるし………

「やだ」

そう言うとき死体モドキの顔に葉をたらした。

モドキの顔はどんどん治っていく、ただし激痛にうめいているがな。

「さてと……………」

取り合えずもう一人をにらむ。

「ヒッ！」と小さい悲鳴を上げなのはを離した。

彼はソレを見ると死体モドキの懷から宝石のような物を取り出した。

「あゝ、二つ聞きたい事があるんだけど……………返答によっては生きて帰してあげても良いよ」

そう言って逃げ出そうとした子供に言い放つ。

「わ……………分かった！！話すから！！！！」

急に怯えだす、まあ封印も解けたせい か力が戻ってるし、不老不死の呪いの方も解けてるし……………

「じゃあさっきの転生者トリッパの事を教えてよ」

「アンタ、転生者じゃないのかよ！」

「ああ、だからとつとと言え」

転生者、神によって力を与えられた者の事、そしてこの世界では二つの力を使うことが出来るらしい。

「馬鹿龍にシヨタ神にまど神は一体何やってんだ……………」

そう言いながら頭を抑える彼……………
なおこの三人はこのときに

「俺は現在処理中です」

「ボクだって忙しいんですよ!!遊びたいんですよ!!」

「私はちよつとこれは専門外かな?」

だ、そうです。

「まあ二つ目、あんたらの魔法陣の名前は？」

「ベ……ッベルカ式とミッド式です！」

「ふくん、帰って良いよ」

そう言うと、少年は必死に走り出していた。

「早！でも恐らく脱落だな、コレ奪ったし」

彼が持っていたのは、でばいすと呼ばれた端末だった。

旅人

「さてと……………コレはあとでじっくり解体^{しち}べるとして……………」

彼は二つの宝石を懷に収め、そしてひょうたんを取り出し蓋を取り、中身を飲もうとした。

だが肝心の中身、つまり酒が無かった……………

「マジかよ……………」

このときの彼は頭の中でこんな漢字の図式が出来ていた。

お酒が飲めない⇨死

取り合えずこの間に何があったかは小一時間問い詰めても意味は無いだろう。

「ヤバイな……………」

彼の所持金はいまだ零、何故生きてこれたのかは人じゃないから……………

そして彼は少し呆然としている少女、なのはを見た。

彼女の家に行けばお酒を貰えるかも知れないと……………

「ちょっといい？」

そう言って彼は話しかけた。

「家にアルコールが入ってるもの無い？」

「成る程ね、お父さんが怪我してたのか」

「……………うん」

そう言って頷くのは……………顔の表情は全くといっても良いほど変わってない。

まあお酒さえ貰えたら良いのだが……………

「………」

そう言って部屋の前までやってきた。

部屋を開けるとそこには包帯だらけの青年が居た。

実際の年と本当の年齢は違う事だけは分かる、それ以上に気になるのは……………

……………その匂いだった。

「（血の匂い……………かなりの修羅場を潜ってるな……………少なくとも関わりあいたくない……………しょうがない、治したらすぐ出て行こ

う…………お酒は盗めばいいか」

少し危ない考えをしていたが顔が真面目になり、ある薬を取り出した。

それは劇薬であり毒薬でもある、ただし使い方によっては良薬になる。

彼はそれを青年の口の中に入れた、その瞬間青年の体が痙攣した。青年は目を開き息を吸い込んだ、そして体が麻痺したかのように震えだした。

「一時間だけ麻痺する、その代り体の免疫力と回復力が上がるから、まあ痛みは無いでしょ」

そう言うとは彼は部屋を出て行こうとした、それをなのはが止めようとする。

「ありがとう……」

「良いよ、気にしなくて」

そう言って立ち去ろうとした、だがなのははそれを許そうとしなかった。

「御礼「良いよ別に」じゃ…………じゃあ名前は？」

「立原立花」

「女の子っぽい名前だね」

「もちろん偽名だけどな」

「何で偽名!!?」

軽いボケと突込みが成立した瞬間だった。

「アハハハ、名前知りたい?」

「うん」

「教えない」

「教えてよ!!」

今度は頬を膨らませた、少しずつだが子供らしさが戻り始めていた。そして彼は少しだけ笑い、こう言った。

「じゃあ俺の呼び名が分かったら良いよ」

そう言って彼は走り去っていった。

「で、お仕舞いな」

高町なのはは話終えた、彼との出会い、そして常に身に着けている
宝石の事も……………

「へえ、なのはも気になる男子居たんだ」

なのはをからかう様に言う、少女……………アリサ・バニングス

「にやははは、そんなものじゃ……………なくもないかな」

「なのはちゃん!!?」

「マジで!!!?」

なのはは笑いながら少し考えそれを肯定し、紫色の髪をした少女、月村すずかがその言葉に驚いていた。そういうアリサも驚いていた。

「でも、その子転生者じゃないのか？」

「多分、記憶喪失とか……」

そしてこの二人は転生者、月村闇にフレア・バニングス二人とも双子な為見た目はすずかやアリサに似ている、そして生前は二人ともお爺ちゃんまで生きていた人だ。

つまり原作を知らない上に一般的に頼む能力も持っていないのだ。だがそれ無しでも強い。

まあ年の差は簡単には埋まらないだろう。

「そこは多分そうだと思う……でもあの子は……」

本当に寂しそうだった。

「ふふふん」

鼻歌交じりに進んでいく一人の少年、彼………その姿は前の姿より成長しており服装も変わっていた。

赤の着物に赤の袴、そして赤と黒の着流しを着て、それに似合わないでかい帽子をしていた、そしてひょうたんの蓋を開け中にある酒を飲み干した。

「あゝ、このスピリタス美味しかったな」

彼はそう言うといょうたんに別の酒を入れ始める。

そしてよくあるネックレスを剣に変えて宝石を取り出す。

「それにこの宝石も手に入っただし」

その石は？と書かれていた。

再開

「で、残りは六個なのね」

緑色のポニーテールをした女性、リンディ・ハラウンがその場に居た少年少女たちにそう言った。

そこにはなのはにユーノ、クロノ、そして正史では居なかったフェイトやアリシア、プレシアにリニス、アルフ、そして転生者の1人である柿音鉄也がいた。

「はい、あと六個です！」

ユーノがリンディの言葉を肯定したのは達はその言葉を聞くと喜んだ。

「でも、最後まででは油断できない」

「あのなあ、だからお前はKYって言われるんだぞ」

クロノは喜んでたなのは達にみずをさすような言葉を言って台無しにして、鉄也がそれに対して突っ込む。

「だが………転生者がジュエルシードを手に入れていたら………」

「多分、それは無い……………転生者なら分かる」

鉄也には転生者か転生者じゃないかを知る能力、判別スキルを持っている。
これで近くに転生者が居るか分かるのだ、しかも能力も分かる。
まさに対転生者用の能力だった。

「まあいい……………そろそろ着くから……………準備をしないと………
………S2U!」

クロノはそう言うと言とデバイスを起動させた。
ほかにも起動させ、転移魔法を使おうとした。

「ッ……!! 強力な魔力反応察知……!! ジュエルシールドに当たります!!
」

エイミーがそう言った瞬間、空が赤く光り、空から赤色の砲撃がジュエルシードのある海に直撃した。

海はその時の衝撃で水面が爆発し、高熱で海水が蒸発していく。

たった一発でさえ高町なのはのディバインバスターを上回る魔力の奔流……フェイト達はそのいきなりの砲撃魔法に驚いていた。

鉄也はその砲撃魔法が転生者による攻撃ではないことに驚いていた、転生者クラスの高魔力を放ったことに。

そしてなのにとっては印象深い紅色に近い赤……

それが自分が変わる切っ掛け与えてくれた人の色だったからだ……だが

だが驚くにはまだ早かった。その砲撃一、十。とどんどん赤い砲撃が同じ場所に直撃していった。

六つのジュエルシードは高い高魔力の砲撃を連続で喰らったため封印された。

「・・・・・・・・な、なんなんだ・・・・・・・・今の砲撃

魔法は・・・・・・・・・・」

あり得ない、それが感想だった。

ミッド式魔法ですら、あのような連写は不可能。

ラピッドがあれば別だがそれでもあそこまでの数は不可能だ。

転生者クラスの全力の魔力なら可能だが、あれはあくまでも同時に・・・・・・・・これは連写だ。

だからこそ、目の前の光景が信じられなかったのだ。

そして、空の上にあったのは巨大な魔方陣だった、だがミッド式でもなければベルカ式でもなかった・・・・・・・・その模様は星型だった。

そして、空から魔力でできた赤い羽根を使いながらゆっくり降りてきた。

その姿はなのはやフェイト、鉄也と同じくらいの子供で黒いマント、血のように赤い着流しに血のように赤い袴を着ており、肘からある赤い布を着けていた。

髪の毛は色褪せることを知らないかのような漆黒で、女の子のように長い髪でそれを乱暴に一つにまとめられている。

顔は幼さを残す所てまはなく、完全に子どもの顔付きで女の子のよ

うな顔、つまり女顔に童顔だ。
そしてその格好には不釣り合いで似合わないデカイ帽子を着けていた。

なのはにとっては幼い頃に父の傷を治してくれた恩人で、自分を転生者から守ってくれた人だったからだ。

成長していたが、かなり分かりやすかった。

「あの子はッ!!?」

なのはの表情は驚きに満ちていた。

そしてなのはがあの子の少年の事を知っていると判断したリンディは転生者だと判断し鉄也に、相手の能力を聞く事にした。

「鉄也君、相手の能力は何?」

「・・・・・・・・分らない」

鉄也には分からなかった。彼の能力はあくまでも対転生者ように特化している。

だが、それはあくまでも転生者に対してのみだ、それ以外にはほとんど無害で無力なのだ。

つまり転生者じゃないあの子には無力でしかない、言う事だ。

転生者と同等の魔力・・・・・・・・・・つまり化け物
クラスの存在と戦わないといけなくなる、その事実がアースラに乗
ってる全員に突き付けられた。

「リンディさんッ！」

なのはは大声を出し、乗組員全員の意識を戻した。

「な、何かしら・・・・・・・・・・なのはさん」

リンディはなんとか正気を保ちながらなのはの話の話を聞こうとした。

「私わたしッ！！あの子と話して来ますッ！！」

「「なんですって！！？」」

リンディだけでなく、今度はプレシアまでもが驚き、声を上げた。

「駄目だ！！危険すぎる！！」

なのはの言葉を理解し、その危険性を理解したクロノはそれを止
めようとしたが・・・・・・・・・・

「邪魔なのッ！！レイジングハート！！set up！！」

ガキヤッ!!

「がっ!!!?」

なのははレイジングハートを起動しクロノを杖を使って頭部を殴った。

その光景、なのはがクロノをデバイスを使って殴ったのを見たフェイト、アリスア、プレシア、鉄也、エイミィ、ユーノ、リンディは固まってしまう。

クロノがぶっ飛ばしされて、固い床に激突するまで、長い時間がかかったかのように思えたが・・・・・・床に激突して全員が意識を取り戻した。

「ク、クロノ君っ!!!?」

固い床に激突し、ヤムチャのごとく倒れたクロノを見たエイミィはすぐさま駆け寄る。

クロノは頭部をおもいきり殴られたが大した怪我はなく、脳震盪を起こした程度ですんでいた。

「リアルヤムチャだ・・・・・・クロノがヤムチャになってしまった」

ドラ○ン○ールをこの中で唯一知っている鉄也は、クロノの今の現状を見てそう言った。

「いや、ヤムチャって誰ッ!!? それよりもなのはは!!?」

フエイトが鉄也に対して突っ込み、この現状を作った友人・・・・
・・・・高町なのはを探した。

だが、既になのは外に出ており少年と会っていたのだから……
……

「久しぶりだね」

なのは目の前に浮いている少年にそう言った。

「……………誰だっけ？」

目の前の少年は少女の顔を見て全く分からないような顔をした……………
……………
だが他人から見れば明らかに知ってるような顔だった。

「知ってるくせに」

「あゝ、ここで冗談を言えればなゝ」

少年は残念そうに笑った。

「ま、久しぶりだね……………なのは」

「うん、そうだね」

何年以来の友人の会話、そんな感じだった。
遅れてきたフェイトたちも呆然としている。

「で、俺の呼び名は分かった？」

「あゝ、ごめんなさい……………」

「まあそうだよね、あれじゃあ分からないか……………そうだなあ、ヒントをもう一個上げるよ」

彼は笑いながらヒントを言うことにした。

「大神天照に謙譲された神器を持っていたものの血を受け継ぐ者、これがヒント」

「うーん、それでも分からないかな？」

「マジデすか」

再開（後書き）

彼の呼び名のヒント

三種の神器に関わりがある。

ただし彼自身は大神天照にはかわりはない。

幻想

「まあいいや、取り合えずそのジュエルシード渡してもらえる？」

なのはが一言、そう言った。

だが彼は「あははゝゝゝゝゝゝゝ」と乾いた笑いをすると六つのジュエルシードを魔法陣に掲げた。

「悪いけどそれは無理なんだよねゝ」

そう言うのと刀に全てのジュエルシードを貯蔵した。

「あ、一応言っておくけど別にコレが欲しいわけじゃないよ、つかこんな化学の副産物は俺にとって毒にしかないから」

真面目にそう答えた。

その顔には少しの笑みを見せない、人ではない何かの顔のようだった。

「まあ俺との喧嘩に勝てばあげるよ、もちろん加減だけはしておいてあげるから」

そう言って刀を構えた。

「はあ、何で最初の頃のフェイトちゃんみたいなんだろう」

なのはは少し溜息を吐き、それを見た。

「じゃあ喧嘩開始、何人でもかかっておいで」

彼はそう言うのと刀の柄の部分にあるものを加えさせた。

「じゃあ、布都御魂剣……………カートリッジロード」

カシャン、と何かを叩く音がした。

次の瞬間、剣に膨大な量の魔力が附加された。

「慙愧一閃！」

赤い斬撃、それがなのはと放れた場所から放たれた。

その斬撃は赤い閃光となってなのはに飛ばされた。

なのははそれをプロテクションで防ごうとした、だが……………

《マスター！回避を！！！！》

レイジングハートがなのはにそう言った。

「え？」

なのはは言われるがままに回避した、だが突風の影響で吹き飛ばされそうになる。

「きゃあ!?!」

そして足に少しだけ当たり皮膚に切り傷が出来た。

「え!?!」

アースラ内部

「まさか殺傷設定か!?!?!」

クロノがそう言った。

「ううん違うよ！非殺傷設定なんだけど」

そしてエイミィがそれを否定する。

「斬撃を飛ばしたのか？」

鉄也がそう言った。

「……………」

フェイトは……………

海上

「うーん、まだ未完成だからな………しまつとこ」

彼はそう言う、刀を鞘にしまった。そして徒手空拳の構えをとった。

一方のなのは、足に出来た切り傷を魔法で止血していた。

「……………大丈夫？」

彼はそう言うとなのはに近づいた。

そして手が赤く光るとなのはの傷が治癒し、治った。

「治したから、じゃあまた……………」

「再開」と言おうとしたところで彼は拳を上には振り上げた、その拳に雷撃が落ち、相殺した。

そしてその攻撃をした相手を見て笑った。

「うん、今のは良かったよ、でももう少し強くやらなきゃ」

なのはも彼を攻撃した相手を見た、その相手は自分の友人であるフエイト・テストロッサだった。

「なのは！」

「フエイトちゃん！？」

フエイトだけではない、鉄也にクロノにユーノも……………

「うん、これでようやく対等な立場になった」

彼はかなり楽しそうに話していた、まるで戦う事、殺しあう事を楽しんでいるように……………

「時空管理局だ！！君のやってる事がどれだけ危険な事か分かっているのか！！？」

クロノがそう言う。

だが相手は転生者ではない事は知っている、つまり自分達つまり管理世界の住人だと分かる。

「じくうかんりきよくって何？」

だが彼は全くと言っても知らなかった。

「取り合えず、少し説明してもらえる？本当に分からないから」

十分後

「へえ、次元世界かあ……………聞いた事はあるけど……………」

そう言いながら、クロノの顔を見る。

「悪いけど俺はこの世界出身でこの世界で魔法を習い、一応大魔法使いと呼ばれるほどになった存在だ」

「馬鹿な！！この世界に魔法技術は無いはず！！」

「そうだよ、異端だから殺され消された。もう数えるほどしか居ないんじゃない？」

彼から言われた言葉は衝撃的だった。
それをさも簡単に言われた。

「大半は魔女狩りで死んで、生き残った奴が捨食の魔法を使って9割近く幻……………これは駄目か」

途中まで言って、口を止めた。

彼には外の世界、そして管理局にはいえない事情があった。

「まさか！！！」

「そう、君の思っている通り……………言わないでね」

鉄也がそれに反応し、彼はそれを肯定する。

「それが分かったら転生者たちは！！」

「まあそうなんだけど……………まあ借り物のチートじゃ本物のチートには敵わないから……………」

「そうだな……今思えば管理局相手でも圧勝しそうなところだな」

「ちょっと待ってくれ、話が見えない」

鉄也と彼が話しているのをクロノが止める、止めておかないと永遠に話し続けてしまいそうだったからだ……。

「まああそこは駄目、すごく……言えないから、マジで」

だが話を無視して話した。

「うん、言わないでおくよ」

「だから話が分からないんだが………」

「大丈夫だ、今終わった」

鉄也が話を終えた、ただクロノは納得していなかったが……。

「まあ、ジュエルシードだけ？それについては俺に喧嘩で勝ててからね、一応俺の一族ではそれが原則だし、等価交換のようなものだから」

そう言うのと鉄也は溜息を吐き、色々とあきらめた。

「まあいいか………あんたの種族に関しては大抵分かったよ」

「ああ、分かった？」

「ここまで馬鹿正直な種族なんて一つしか知らないからな」

「一応その種族ではあるけど……まあいいか、じゃあ、喧嘩再開
！」

そう言って拳を鉄也に振るってきた。

それを鉄也は障壁で防ぐのではなく、思いつきりかわした。

「おい皆！！距離を取れ！！あいつの拳一発でも喰らえば防護服を
いくら着けてても死ぬぞ！！！」

鉄也が真面目な顔をしてそう大声で言った。

少なくとも彼だけにしかわからない事、転生者と言うメリットがあ
っても相手が人外、いや完全に化物である以上人間では勝てない事
は明白。

つまり今自分達にできる最善の事をし続けないと勝てないのだ。

「ああ！！かわされた！！！！」

ドーンッ！！ドドドドド

そう吼えた彼の拳は衝撃波を生み、海を叩き割った！！

そしてその時の威力で海水が局所的なスコールを生み出していた！！

「……………死ぬな、コレ」

「ああ、想像以上だ……………」

クロノは彼が放った拳の威力を見て、鉄也は想像以上に化物みたい

な破壊力を持つ拳に絶望していた。

ちなみに彼は魔力を付加していない、何にもない普通の拳だ、それだけで絶望できるだろう、魔法無し、素でチートな化物と戦う事に……………。

「僕は間違っていたよ、この世界、97管理外世界は明らかに危険で、滅んだけれど確実に危険な魔法が存在する世界だったよ」

「ああ、転生者たちも軽く死ぬる世界だったな、……………うん、俺を転生させた神様が言っていた事がようやくわかった」

二人は悟りを開き、仙人のようになった。

「……………かなり加減しなくちゃいけなくなったな……………」

彼はそう言うと言力値Bランク程度まで下げた、この時、二人にとっては魔力よりその肉体の強さを下げて欲しいと思ったとか……………

「……………」

私は今信じられないものを見ている。

取り合えず彼が魔法を使わず、海を叩き割った事だろう。

普通人間が魔力を込めず、いや込めてもそこまでの威力はしない…
…つまり元からの体質なのだろう。

だが彼はすぐに魔力を下げた、本当は腕力などの力を下げて欲しいのだけど……………」

少なくとも彼は本当に私達と敵対関係になるつもりは無いのだろう、敵と戦いながら態々力を落すなんてそんな馬鹿な事はしない……………」
それに彼は管理局を知らない、そして彼の魔法陣は今まで見たことの無い術式だった。

そして彼が言っていた事……………」『そうだよ、異端だから殺され消された。もう数えるほどしか居ないんじゃない？』
つまり彼はそれを見たことがある？

「どちらにせよ……………」この世界には魔法技術が合ったことは確かね……………」

何時の間にか呟いていたその言葉はエイミィの耳に届いていた。

「だからこの世界にはたまにですが魔力が高い人物が現れるんですね」

「でも彼の話通りなら……………」この世界にもまだそれを受け継いでる人が居るってことね……………」

そう、私には一つの仮説が立っていた。

「それも魔導師が一箇所に集まっている……………」

その土地の人たちに管理局の事を話せば……………」

「駄目ね」

その人たちはかつて魔法が使えるから異端扱いされ殺された。
その子孫はきつと、いや必ず人を救う事を考えない。

「本当に可哀想な世界……………」

この世界は魔法があるから不幸になった、ミッドチルダほどの化学
力があるならばきつとそんな事にはならなかっただろう……………」

ならば一つ気になる事がある。

この世界にも魔法技術があったならば……………必ずとは言えないほ
どでもないがロストロギア、またはロストテクノロジーがあるのも
明白……………」

それに彼の帽子は……………ロストロギアに匹敵するほどの魔力が込
められていた。

しかもその帽子にはいくらかつぎはぎの後が見える。

「彼は間違いなく、そのロストテクノロジーを知っている」

恐らくだけど彼の帽子がエネルギー源なのだろう、もしくは肉体の
レベル上げるものかもしれない……………」

(皆、聞こえるかしら?)

そして私は無数の弾幕を必死で避けるあの子達に念話をした。

く鉄也SAIDく

本当に危ない、死に掛ける……………。

あの拳は間違いなく後の魔王を越える一撃になるだろう……………、
つか100%勝てる気しねえよ……………あいつって最強クラスじゃないのか？

間違いなく本当に死ぬ……………

「ちょっとパンチは駄目だったね……………、じゃあ純粹に弾幕で勝負しよ」

そう言って彼は懷に手を入れた。

なんか凄い嫌な予感。

「……………それなら僕たちでも……………」

まあ確かに魔力は下がってるし、一応俺もAAAA+はあるからな………

そして彼は一枚のカードを取り出した。

あ、俺死んだ……………

「鬼神の咎よ、今その力を解き放て………スペルカード、鎖縛「捕らえし地獄の鎖」」

そして彼の背中に魔法陣が開かれ、そこから赤色の鎖と黒色の玉が無数に俺達に襲い掛かった。

そしてどうなったか？

もちろん皆、ガチヨケ

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアなのオオオオオオオオオオ!!!」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「当たる当たる当たるッ!! あ」

ピチューン

「ウワァァァァァァァァァァ！！！」

「世界はいつだってこんなことじゃないことばかりだああああああああああああ！！！」

「……………」

取り合えず本気で避けないと堕ちる、つか一人堕ちたぞおい……………でもそんな事考えてられない、だって避けないと自分が死ぬから……………

玉はそれほど警戒する必要は無い、だが鎖は別、アレは追尾する。そして浮いてる玉に当たってしまう。

よく出来ている、相手を逃がすことなく確実に倒す、でもそれには卑怯な事は無い、正々堂々なのだ。

そして30秒がたつ頃には……………

「……………スペルカードブレイク」

そう言っただけでカードは砕け散った。

「はああああ……………終わったのか？」

「いや、恐らくけど……………」

「アルフーツ！！！！」

フェイトには悪いけど……………すぐに始まるらしい。

「じゃあ次はコレ、次元崩壊「ディメンションキック」」

そう宣言すると、体が赤く光、光が包み込んだ。

そして……………

「トウツ!!」

こっちに向かってキックをしてきた。

まあ早い話ブレインングスターと同じだ。

つまりそれを避けても弾幕が散らばる……………しかも蹴りそのものが広範囲のレーザーのようだった。

自身も守れる上、攻撃にも向く……………まあくらっても身体的なダメージは無い、だが明らかにあの蹴りは魔力ダメージであっても死に掛けるくらいの激痛が襲い掛かるだろう。

少なくともコレで非殺傷設定であっても危険じゃないと、言う事が分かるだろう。

いや、ある意味こっちの方が酷い、拷問だよ……………拷問だ、うん。

だけど俺達だって喰らい続けるのは嫌なんだ。

「ナイトメア・ブリッツ!!」

俺の槍型デバイス、ロンギヌスの先端に魔力が集まる。

槍だからそれで突撃する、確実にこっちが押し負ける……………ならば

!!

「バースト!!」

先端から一筋の黒い光が発射された、それは赤い魔力のレーザのような蹴りにぶつかり削っていく。

だが向こうの威力が高いのか、痛みなんて無視しているのか分からないが突き進んでいく。

「なのは!! 砲撃を!!」

「あ、うん!!」

なのははすぐに魔力を溜め、杖を向け……

「ディバインバスター!!」

桃色の砲撃を放った、いつ見ても強い魔力だ……それは蹴りとぶつかり合い相殺してカードを壊した。

「お、中々やるね……じゃあ後二枚にするか」

俺達は思った、後二枚もあるのかと……

「鬼符「偽善の人間と偽悪の鬼」」

あいつを中心に白と黒、赤であしらった弾幕が襲い掛かってきた。

ただの弾幕ではなく三度反射する弾幕、結界の中だから反射する、それはつまり…………

「360°。全方位を囲む弾幕の結界もどきか……………」

「正解、コレをどうやって抜ける？」

あいつはあざ笑うかのように言った、いや楽しんでるだけだ……………
ああ、正直言うと楽しいよ、頭使うし体も使う、まさにゲームのようだ。

あいつも敵意は無い、まあ怒らせなければいいだろう、謝れば大半は許してくれるような奴だと思うし……………。

「でも弾幕は弾幕で相殺できる……………ディバインシューター!!」

なのはがディバインシューターを放った、その数は……………14個!!?
!?

しかもコントロールは無意識でしているし、それに魔法陣の形が星型に……………

「なのは!!魔法陣の形が」

フェイトがなのはの魔法陣に気付く、だけどなのはは全くと言っても聞こえていないらしく、顔には汗が浮かび、デバイスには罅が入っていた。

デバイスが魔力に耐えられず崩壊していく……………いや、侵食している。

魔力弾は弾幕と相殺し、道ができた。

「スターライト……………」

なのはすぐに大気中に散らばった魔力をかき集めていた。

「ブレイカー!!!!!!」

なのははスターライトブレイカーを放った、だがその力は前の二倍はあるだろうか……………

それだけ威力が高くなったのだ。

戦うたびに進化していく、まるで主人公だな……………

いや、主人公か、転生者には持ち得ない物、持つ為には転生者であることを全て捨てないといけない……………

「全く、かっこいいな……………」

何時の間にか呟いていた言葉は轟音と共に消えていった。

その轟音の中でパキンッ!と何かが砕けた音も響いた。

「スペルカードブレイク……………最後のカードは何にしようかな?」

そう言ってカードを取り出そうとした。

「今がチャンスだ!!」

クロノがそう言って、杖を向けた。

「ステインガーブレイド……………」

クロノの周りに魔力刃が浮かぶ。

「エクスキュージョンシフトッ!!」

100を超える魔力刃があいつを襲う、だがあいつも魔力弾を30個ほど浮かべそれと相殺した。

しかも自分が生きていられる最低限の隙間、そしてこっちに向けて魔力弾を一つだけ投げた。

それはとてつもない速さで進みクロノに直撃し、爆発した。

「あぐっ!?!」

クロノの防護服はバリアジャケットばろばろになっており、頭から血を流していた。

「たくっ……………魔力が下がっているのにこの威力とは……………」

「魔法を当てた瞬間爆発させているんだ、さっきのクロノの魔法も爆発させて相殺したんだと思う」

いや、多分それだけじゃない、横や斜めからの攻撃で確実に破壊しているんだ。

それにクロノに当てた攻撃は自分で掴んで投げた、元々が馬鹿力なあいつにとっては簡単に行える行為だ。

だが見ている側から見ればなんて危険な行為、やられる側からみれば非常に嫌な一撃だ。

手で掴むなんてまずありえない、魔力弾はエネルギー体だ、以前試してみても分かった、危険なんだ。

高エネルギーを素手で掴むのは明らかに危険すぎる、軽く火傷はするだろう……それすらも気にしないのはやはり種族的な差か……。

そしてそれを投げるのだ、魔力で強化されているため、野球選手並いや、それ以上の豪速球で投げってくる……避けられない……改めて思う、戦闘においてなら間違いなく転生者をも越える。

「少なくとも、最後のカードを出す前に決着を……」

（皆、聞こえるかしら？）

リンディさんの念話が聞こえた……

（何ですか母……艦長……）

クロノは母さんと言いかけていた……言ってもいいのではないかな？少なくともクロノは疲れきっている、なのは話を聞いていない。

（あの子の帽子、恐らくけどロストログアに近い物よ）

（なっ!!）

（あれを取れば恐らくだけど力が下がるはず）

いや、多分そんな事はないだろう……………
でもやってみる価値はある。

「ブレイズキャノン！！」

炎熱を纏った砲撃があいつを襲う、だがアイツはひらりと避けた。

「惜しい惜しい、と言いたいけど、この帽子だけは狙わせないよ」

あいつの目はいきなり怖くなった。

そして後ろからフェイトが

「ハーケンセイバー！！」

金色の魔力刃を飛ばした。

それはまたかわされた。

「甘い！！」

あいつはフェイトに向けてカードの名前を言おうとした。

「リフレクト!!」

俺はその隙をつきフェイトのハーケンセイバーを自身の魔力を付加し、跳ね返す。

「ッ!! チィ!!」

それを避けようとするアイツ……………でも甘い!

「チェーンバインド!!」

「なッ!!」

アイツの右腕にユーノのチェーンバインドが巻かれる。

それでもアイツは左腕でバインドを破壊しようとする。

だがそれよりも早く誰かがアイツを後ろから抑える。
それは……………アルフだった!!

「くそ!!」

「放さないよ!」

そして、ついに跳ね返したハーケンセイバーがアイツの帽子に当たった。

帽子が破けて、長い髪の毛が重力に従って下に下がる……………。

そして頭からは……………片方だけ傷がついた角があった。

幻想（後書き）

オリジナル魔法解説

・ナイトメア・ブリッツ

貫通力を極めた魔法。

シールド付加の防護服をいともたやすく貫通する。
バリアジャケット
当たり判定が少ない。

・リフレクト

相手の攻撃魔法を跳ね返す魔法、相手がそれよりも高い魔力で攻撃した場合、跳ね返せず破壊する。

改良の余地は高く、応用性も高い。

忘れ去られた幻想

角、見間違いでもなく本物の角！！日本人なら誰でも知っているあの妖怪、鬼のシンボルだ。

俺はやっぱりと思い溜息を吐き、その他の人物は角がついてるくらいにしか思えなかった。

なのはに関しては何も聞こえてないようだ。

「本当に鬼かよ……勝ち目ないじゃないか」

恐らくだがさっきの帽子は力を抑える為のもの……それでも素で怪力なのは驚くが強化に関しては魔力以外の力、霊力、妖力、神力がある。恐らくだが少しだけ光ったのは霊力か妖力だろう。

少なくとも本気の勝負では勝ち目は無い、だけど向こうは手加減してくれている……。

もしかしたら勝てると思っていた。

——向こうを完全に怒らせていたのにも気付かずに……。

「……………よくもッ!!」

アイツの表情は怒り、自分の命よりも大切なものを壊された目だ。やっちまった、としか思えない……………謝れば許してくれるかもしれないが少なくとも落ち着くまでは許してはくれなさそうだった。大切なものだったようだ、そりゃあ怒るよな……………本当にやっちまった、ああいうのは分かってたち森だったんだけどなあ……………。

そしてアイツは赤黒い、一枚のカードを取り出した。

「必然」

その言葉、いやその次に言う言葉が何故か分かってしまった。だとしたらこっちに勝ち目なんか無い……………アレを発動させるわけにはいかない。

「皆!!逃げ

「キングクリムゾン」

「ガハッ！！！！？」

何が起きたか分からなかった、知っていたのに？ いや、そういう訳じゃない……頭で理解しようとしても追いつかない、体ですら攻撃を受けた事にすら気付いていない……。

他の皆も驚きだけだった。

あ、体に少しずつだけと反応が出てきた、痛覚も……ッ!!!!!!

「……………ツツッ!!! アアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

痛みも無い、熱くも無い……。だけど体が軋みをあげている……。
 ……口から血を吐き出す体中に裂傷ができる……。目の前が真っ暗になる……。。

ああ、久しぶりだったが思い出せた。これは死ぬ瞬間だった。

他の皆も同じような状況だった、そして海に向かって落花する。約一名を除いて……………？

あれ？何でなのだけ………が？

駄目だ、目の前が真っ暗になっていく……………

だ……………め、だ……………な、俺……………は

「……………あゝ、クソッ!! やりすぎた!!!!」

いくらなんでも戦いの場に帽子をつけてきたのは間違いだった、確かにアレは拘束具だったし、お姉ちゃん達から貰った物だったけど……お気に入りだったし治せるけど……ああやりすぎた!! いくら相手が魔力で出来た鎧を着けてて一発しか殴って無くても本気だったから本当にヤバイ!!

「子供相手に本気出すなんて……………確かに俺は少し違うから、体は本物の子供だけどさあ……………」

そう言って頭を抱える、いくらなんでもやりすぎたか？

ウ
――
ア

「ん？」

なんか聞こえたような気が、海に落ちた奴等か？ いやでも……落
ちたのは5人だった……あ

[illegible]

ああ、一人居たな……………そういやさっきあの子この世界の魔法使
ってなかった？

そして連続で使ってたような……………つてッ！！

「暴走してんじゃねえか！！！」

完全に獣の目になっていたのはを見ながら言った。

あれってかなり危険だからな……………魔女狩りの原因にもなった
し、まあ最初は休み休みでやらなきゃ暴走する必要は無いけど……
……つか今は関係ない……………あれは本当にヤバイ。

そう思いながらなのはの杖を右腕で防ぐ。

ガキーンッ！！と普通は絶対にならない音が周りに響く。

「ツチ……………理性の無い獣は殺すのが簡単だけど……………」

一旦距離を取って体全体に魔力を燈す……………。

この技法はかなり昔に使ったのが最後だからなあ、上手く使えるの
かが不安すぎる……………が、まあやらなくちゃいけねえからな。

加減すると言っておきながら本気で戦った自分に腹立たしく思いな
がらもやるしかない。

「……………ハッ！！！！！」

体全体に魔力を放出させる、それが鎧のように纏わり付く。

「殺さずに生かすのは簡単には行かないからな！！！」

「大丈夫！？……………じゃ、無いわね、どうみても……………」

目の前には苦しそうに咳をしている皆を見た、みんなのバリアジャケットが破損している。

そのせいなのかいまだに苦しそうな彼等はようやく意識を取り戻した。

「ガハッ……………ゲホ……………ここは？」

「アースラよ」

一番最初に目が覚めた鉄也君、彼が転生者だっていうのもあるけどやっぱり鍛え方が違うのかしら？

「ゲホ……………そうだ、なのはは！！！！？」

「……………今戦っているわ……………」

「……………戦いを……………止めさせないと」

「ウグルルルルルル!!」

「最早獣同然だな……………」

魔力の鎧も解けた、まああんまり期待はしていなかった、流石に人間とはいえ暴走状態じゃあやばいからな……………。さてと……………

「まずはあの杖が厄介だな」

《マスター!! 正氣に戻ってください!! マスターツ!!!!》

あの杖のAI（人口知能）がなのはに語りかけている、でも無理だ。魔力の暴走がそんな簡単な方法で正氣に戻るわけが無い。

取り合えずあの杖が厄介だな、まずは武器を破壊しなくちゃならないんだけど……………意思を持っているのなら……………

「おい、杖」

《杖じゃありません!! レイジング・ハートです!!!》

「まあどっちでも構わない、一回お前壊すけど構わないか？」

《は?》

まあ当然だろう……………いきなりこんなこと言われたら……………。でも武器があったら大変なんだよな……………

「大丈夫! コアだけは残しておくから……………」

《いや、大丈夫じゃないです、貴方の力では明らかに……………

「拳舞・落葉」

人の話を無視しないでください!!」

拳を引くような構えを取り……………

放っツ!!

《キャアアアアアアアアアア!!?!?》

なのはの持っていた杖が三つに壊される、少なくとも安心……………

「ガアアアアアアアア!!!!」

ドスッ!!

じゃあ無いね、どう見ても、壊れた杖の棒を思いっきり肩に刺したな……………少しだけぶっ飛ばすか……………

「ウグリアアアアアアア!!!!」

なのははもう片方の杖の破片を刺そうとした……………確実に殺す気で来ているよ……………

「でも遅い……………」

俺は魔力弾を一つだしそれをなのはの胸の前に置く、それが六角形

の形になり……………

「ぶっ 飛べ」

なのはをぶっ飛ばした、なのははそのまま海面に激突し、水柱を上げた。

海面が一度だけ弾け、なのはは浮いていた。

「あゝ、こりゃあなあ……………レイジングハートだったっけ？」

《……………なんですか？》

「色々とすまないな……………一週間後ここでまた……………」

そう言うレイジングハートのコアをなのはが居る場所へ投げた。

そして俺は転移した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333w/>

魔法少女リリカルなのは 化学と幻想

2011年10月22日00時16分発行